| 受験番号 | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 氏名 | | | | | | |

# 二〇一八年度 教育学部 外国学生入試 問題用紙

## 国語国文学科

## 「小 論 文」

【問】次の文章を読んで、後の問に答えよ。解答は、解答用紙の所定の欄に記入すること。

「幽玄」「艶」は中世を代表する美的理念です。和歌においては、藤原俊成がこの理念を確立し、後には、茶道をはじめとする日本の芸能や、A谷崎潤一郎の『陰翳礼讃』にまで受け継がれていきます。時代や人によって微妙にその意味が異なるのですが、ここでは俊成が認めた幽玄・艶の例を中心にお話ししてみたいと思います。

「幽玄」はもともと中国の仏典用語で、奥深く微妙で、簡単には知りがたいという意味を表すことばでした。安易な理解を拒絶するような、神秘性を持つことばだったのです。それが、和歌や連歌、能にも用いられるようになっていきます。和歌や能で言われる「幽玄」は、直接的な知覚によっては簡単に理解できない、未知の部分を多く残すことで、自由で豊かな想像をかきたてるという方法です。明瞭よりは曖昧、単純よりは複雑、饒舌よりはB[illegible]、明暗でいえば薄暗さ、これが「幽玄」の世界です。まさに人間の精神世界を重視する、高度な文化の表れなのです。

一方の「艶」といえば、もともとは色彩の鮮やかさを意味していました。それが、しだいに人間の心を浄化し、深く掘り下げるような、何とも表現しがたい、曖昧模糊とした美を表すようになります。ただ、その美的世界の中核には、失われた王朝文化への憧れがあります。王朝人の恋する姿、風流に身を投じた姿を思い浮かばせるような世界が「艶」の世界と定義しておきましょう。

いずれも、対象との「距離感」が非常に重要な要素です。時間的な距離、空間的な距離、心理的な距離、いずれにしてもある種の距離感がキーワードです。今すぐに触れられる、直接的に感知できるというのではなく、遠くから見つめる、あるいはここにないものを想像するという生き方を志向します。この距離感がもたらす、心の活発な動き、これが幽玄・艶の本質なのです。

では、和歌における幽玄・艶の世界を具体的に説明していきましょう。まずは、西行の歌です。

津の国の難波の春は夢なれや葦の枯葉に風渡るなり　（『新古今集』冬・六二五・西行）

（能因が見た、津の国の難波の春景色は夢だったのだろうか。葦の枯葉に風が吹き渡ってゆく）

第一・二句の「津の国の難波の春」は、能因の次の歌（「数奇」の章〈一六三ページ〉にも出てきました）を指しています。

正月ばかりに津の国（摂津の国）にはべりけるころ、人のもとにいひにつかはしける

心あらむ人に見せばや津の国の難波わたりの春のけしきを

（『後拾遺集』春上・四三・能因）

難波津の春らんまんの風景を見て、あまりの感動に叫びだしそうになる衝動に駆られた歌です。しかし、西行が見た難波津は、荒涼とした冬枯れの景色でした。能因が見た春景色は「夢」だったのだろうか、と西行はいいます。能因が見た色彩豊かな春らんまんの景色と、西行が見

| 受験番号 | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 氏名 | | | | | |

# 二〇一八年度 教育学部 外国学生入試 問題用紙

## 国語国文学科

## 「小 論 文」

たモノクロの冬景色が、時を隔てて二重写しになっていきます。目の前の冬景色の彼方には失われた春の華やかな風景がイメージとして残されていて、ただの冬景色とは違った風景が浮かび上がってきます。藤原俊成はこの歌を「幽玄」と賞賛しました。失われたものへの愛惜、無常観など、読み手の心にさまざまな感情を呼びおこすという点で、まさに「幽玄」の名にふさわしい歌です。

同じく俊成が「幽玄」と賞賛した歌を掲げてみましょう。

C 風吹けば花の白雲やや消えて夜な夜な晴るるみ吉野の月　（『後鳥羽院御集』四一九）

落花の風景です。桜が満開のころは、白雲のような花に遮られて見えなかった月が、落花の時期になると、花が散って、夜ごとに少しずつ雲が晴れるようにその姿が現れるというのです。俊成は、『千五百番歌合』の判詞に「夜な夜な晴るるみ吉野の月など、幽玄におよびがたき様に（ D ）侍る事なり」と、特に下句を「幽玄」としています。春の夜、満開の桜が少しずつ散り去って、夜ごとに月がその姿を現してゆくという、墨絵にも似た、幻想的な世界が描かれています。夜の闇の中での微妙な変化をとらえた、陰影に富む、まさに甚深微妙なる幽玄の世界です。晩年の俊成が、『千五百番歌合』において唯一幽玄と評した歌です。

兼好法師は『徒然草』に、月の美しさを次のように書き記しています。

E 花は盛りに、月はくまなきをのみ見るものかは。（中略）望月のくまなきを千里の外までも眺めたるよりも、暁近くなりて待ち出でたるが、いと心深う、青みたるやうにて、深き山の杉の梢に見えたる木の間の影、うち時雨たるむら雲隠れのほど、またなくあはれなり。椎柴、白樫などの濡れたるやうなる葉の上にきらめきたるこそ、身にしみて、心あらむ友もがなと、都恋しう覚ゆれ。（一三七段）

雲一つない空の満月よりも、一晩中待ち続けてやっと姿を見せた月が青い光を放ち、深山の杉の木の間から微かに光をこぼしたり、通り雨をもたらす雲に隠れてしまったり、というのが比類なく情趣が深いと言います。さらには、椎柴や白樫のような葉の上に月光がさして、きらめいているのを見るのは、身に沁みるようで、「この感動を分かち合える友達が傍らにいたらなあ」（能因の「（ F ）」と同じ発想です）と、都が恋しくなると記しています。こうした兼好の美意識もまさに幽玄そのものです。

では最後に、艶の用例をご紹介しましょう。これも俊成が艶と賞賛した歌です。

見し人の寝くたれ髪の面影に涙かきやるさ夜の手枕　（『新勅撰集』恋三・八二七・藤原良経）

（恋人の寝乱れ髪の面影に、髪ではなくて、涙をかき拭う今夜の手枕よ）

良経が主催した『六百番歌合』の「夜恋」の題詠です。判者の俊成は、「涙かきやるさ夜の手枕、殊に艶に侍り」と記しています。この歌の本歌は、

黒髪の乱れも知らずうち臥せばまづかきやりし人ぞ恋ひしき　（『後拾遺集』恋三・七五五・和泉式部）

です。黒髪が乱れるのも気にせず、一人で横たわっていると、この黒髪をなでてくれた恋人のことが恋しくてしかたがない、という意味です。良経歌に戻ってみると、かつては黒髪をかきやっていたのに、一人寝の今は、その同じ手で涙をかきやっていると詠んでいます。かつて共

| 受験番号 | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 氏名 | | | | | | |

# 二〇一八年度 教育学部 外国学生入試 問題用紙

## 国語国文学科

## 「小　論　文」



寝をしていたときと、一人寝の今とが、同じしぐさによって、二重写しになっています。そのことで、かえって(G)感が強調され、過去の官能的なひとときが強く(H)されているのです。

兼好は、先に挙げた『徒然草』一三七段の中で次のようなことを言っています。

万の事も、始め終わりこそをかしけれ。男女の情も、ひとへに逢ひ見るをば言ふものかは。逢はでやみにし憂さを思ひ、あだなる契りをかこち、長き夜を一人明かし、遠き雲居を思ひやり、浅茅が宿に昔を偲ぶこそ、色好むとは言はめ。（『徒然草』一三七段）

恋愛は相思相愛のクライマックスのときよりも、始めと終わりがいいと言います。恋心も、逢っている時間だけではなく、逢えない悲しみや、別れた後の思いのほうが、情趣が深いと言うのです。良経詠も、別れた後の一人寝がテーマです。兼好の言う「長き夜を一人明かし」という終わりの時期に相当します。ただ、幸せだったときの記憶は消えたわけではありません。実体はないけれども、「かきやる」という同じしぐさによって重ねあわされる過去の時間は、はっきりと一首の中に息づいています。現在進行している恋愛事よりも、想像や記憶のほうに深い官能性を感じるのが、まさに艶の世界なのです。現実よりは空想、肉体よりは精神という、中世的官能の世界と言えましょう。

（谷知子氏の文章による）

問一　傍線部A「谷崎潤一郎」の作品を二つ挙げよ。

問二　傍線部B・Hのカタカナを漢字で記せ。

問三　傍線部Cの和歌を現代語訳せよ。

問四　空欄（　D　）に入れるのに最もふさわしい語句を次の中から一つ選び、正しい活用形に直して記せ。

かひなし　あらまほし　恋し　をさをさし　あるまじ

問五　傍線部Eを現代語訳せよ。

問六　空欄（　F　）に入れるのに最もふさわしい語句を、本文中から抜き出して記せ。

問七　空欄（　G　）に入れるのに最もふさわしい語を次の中から一つ選び、記号で記せ。

ア　距離　イ　無常　ウ　季節　エ　親近　オ　喪失

問八　この文章で説明している「幽玄と艶」に基づいて、あなたの日常生活で感じられる「幽玄と艶」の具体例を挙げて説明せよ。

| 受験番号 | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 氏名 | | | | | |

二〇一八年度 教育学部 外国学生入試 解答用紙

国語国文学科

「小 論 文」

| 採点欄 |
|---|
| |

No. 1

問一

問二 B

H

問三

問四

問五

問六

問七

問八

裏面使用可

ここから下に記入すること ↓

ここから上には記入しないこと